

アウグスティヌスの『自由意志論』

第二巻における証明と探求

梅原久美子

序

アウグスティヌスは『自由意志論』の第二巻で神の存在を信仰によるのみならず、知解によっても捉えんとする。この箇所は、アウグスティヌスにおけるいわゆる神の存在の証明としてよく知られている。本論文では、『自由意志論』第二巻において、アウグスティヌスがここで用いている「証明する」ということが、どのような意味であるのかを考察したい。

一

アウグスティヌスは第二巻において、まずはじめに、神が存在することはいかなる仕方で明らかであるか、つぎに、何であれ善いものはすべて神によって存在するかどうか、最後に、自由意志は善きもののうちに数え入れられるべきかどうかという三つの問いを、探求の順序 (ordo) にしたがって、設定している¹⁾。神の存在の証明は、このような三つの問いの中で、第一番目に解決されるべき問題にあたる。ここで、このような探求の順序が設定されていることから、アウグスティヌスにおける神の存在の証明が、引き続き残りの問題の探求の端緒となり、基盤としての役割を担っていることがわかる。すなわち、ここでの神の存在の証明は、神が存在することがいかなる仕方で明らかであるかという問いが探求されて、神が存在することがかくかくしかじかの仕方で明らかであるという結論に達するならば、それ自体で探求が完結するといったたぐいのものではない。むしろ、第二、第三の問いを解決するための、さらなる探求を促すものなのである。では、このような探求の過程は、アウグスティヌスにおいて、いかなる過程として意識されているのか。

悪の問題のアポリアに直面して自らが経験した呻吟をアウグスティヌスは第一巻の

中で語っている。そこでは、探求にあたっての、知解に先立つ信仰の必要性が述べられているが²⁾、第二巻においても、知解に先立つところの信仰の必要性は、三つの聖句に依拠して述べられている³⁾。イザヤ書 7:9 とともに、ヨハネ福音書 17:3 の「永遠の命とは真の神であられるあなたとあなたが遣わされたイエス・キリストを知ることなのです」および、マタイ福音書 7:7 の「求めなさい。そうすれば、見出すでしょう」が引用されている。アウグスティヌスは、このマタイ 7:7 の聖句を「主御自身が促すことによってわたしたちが求めるものを、同じ主御自身が示すことによって、わたしたちは見出すでしょう⁴⁾」と言い換えている。ここでは、人間が求めることと、見出すこととがともに、神が促し、示すという働きと相関することとして捉えられている。したがって、アウグスティヌスにおける神の存在の証明は、このような人間の探求と発見と、神の働きとが相関する過程において、遂行されているのである。

しかし、このような神の存在の証明は、もし証明するということを、たとえば数学的な命題の証明のごときものとして捉えるならば、論点先取の虚偽であるとして、非難されても当然であろう。神が存在することが信仰によって前提されているのなら、信仰の知解として帰結するところの神の存在は、すでに前提されていたものの、反復にすぎなくなってしまうからである。それゆえ、アウグスティヌスにおいて、証明すること (*demonstrare*) がなんらかの積極的な意味を持つとすれば、それは、数学的な命題の証明における証明することとは、別の意味を持たねばならない。先にたてられた問いによると、神の存在の証明は、神が存在することがいかなる仕方でも明らかであるか (*manifestum est*) という問いを探求していくことである⁵⁾。ここで、明らかであるということが何を指しているのかは、判然としていない。しかし、信仰とは異なるところの知解のありかたが、この明らかであるという点にあることは確かである。したがって、アウグスティヌスにおいて、証明するとは、明らかであるということを知解が捉えることとして考えられる。では、この明らかであるとはどういう事態であるのかを、神の存在の証明の議論の道行きに沿って、以下、考えていくことにする。

二

アウグスティヌスはまず、対話者に対して自己意識の内省によって自己が存在する、生きている、知解するという三つのものを見いだすよう導いている⁶⁾。この存在する、

生きている、知解するの三つはより完全性を増していく段階であり、上位の段階は下位の段階を含み持つが、下位の段階は上位の段階を含み得ないとされる。生きるものは存在することをも含むし、知解するものは生きることと、存在することとを含むからである。これら三つの段階全てを含み持つのはただ知解する人間だけであり、被造世界の存在、生、知解という段階構造における人間の位置は知解することにおいて頂点に立つものとされている。

さて、知解するものとしての人間の、魂の内部においてもアウグスティヌスは身体の五官、五官をさらに感覚する内的感覚、理性が段階をなしていると捉えている。この際、身体の五官、五官を感覚する内的感覚はともに生きるものの段階に属するので、先にあげられた存在、生、知解の区別に加えて、新たな段階付けの原理が導入される。この原理が判断する *iudicare* であり、判断するものは判断されるものよりも優れているとされている⁷⁾。この場合の、判断するとは、魂内部における上下関係の決定原理として、上位のものが下位のものに対して及ぼす規範的作用として捉えることができる。身体の五官、五官を感覚する内的感覚、理性という段階はそれぞれが下位の段階に対して、判断するという仕方でも規範的な作用を及ぼしているので、人間の魂の内部での段階の頂点に立つのは、最高度に判断作用を持つ理性となる。

このように、知解する理性が人間の魂のなかで最高のものとして位置付けられたうえで、神が理性を越えた或るものとして定義される。このような或るものが存在するなら、この或るものが神であることになり、あるいはこのような或るものをさらに越えたものが存在するなら、そのものが神であることになるので、いずれにせよ、理性を越えた或るものが存在することを理性との関係から証明することがこの証明の目標とされている。

アウグスティヌスは、さらに、この或るものを「永遠で不可変的な或るもの」とも呼んでいる⁸⁾。この或るものが理性に内在的に見いだされつつも、その源泉を理性に持つのではないということの根拠は或るものに備わる、この不可変的という性質に基づかしめられていると考えられる。先にあげた、存在、生、知解という段階構造はこの意味では全て可変的なものであり、知解する理性も可変的なものである。理性の可変性が端的にあらわれるのは、理性がある時には真なるものに達しつつ、またある時には達しないというように、可変的なものとして可謬的である点に見られる。では、このような或るものの不可変性が理性に見いだされるのはいかなる場においてである

のか。

アウグスティヌスは理性が認識する不可変的なものとして、まず、数の法則と倫理的な知恵とを挙げている⁹⁾。無論、ここで言われる数とは可感的な世界において数えられるような数ではなく、可感的な世界で数えるということが成立するための原理的な数、とりわけあらゆる数の原理となる一にあらわされるような、可知的な数の意味であると考えられる。また、知恵も、各人の多様な選択にもかかわらず知者でありたいという全ての人に共通するところの精神の内奥に見出される倫理的な法則としての、先天的なものであると考えられる。

これらの数や知恵に共通するのは、人間が各人の理性によって見いだすものであるとともに、すべての人の理性にとって、共通の仕方では現前するという点、つまり個別的な理性によって認識されつつも、それ自体は普遍的な法則として妥当するという点である。このような普遍的な法則は、各人の理性の持つ可変性を越えて、それ自体は不可変的に真なるものとしてとどまっている。そして、この不可変的に真なるものとしての法則は、もろもろの規範 (regulae) として¹⁰⁾、人間の理性に対して、規範的な働きを持つのである。これらの規範については、人間の理性はそれらについて、判断するのではなく、それらによって、判断するとされている¹¹⁾。したがって、理性が不可変的なものを見いだすのは、魂の内部においては最上位の地位を占めていた理性をさらに越える或るものが、可変的な理性の判断における規範として、理性にあらわれる場においてであるといえる。

しかし、ここで問題となるのは、理性の判断において捉えられるのは、個々の不可変的な真なるものであって、これらすべてが理性を越えた或るものであるとすると、或るものは複数存在することになるのではないかという点である。これらのもろもろの規範は、不可変的に真なるものとして、人間の可変的な理性が、構成したものではなく、むしろ、理性の可謬性にもかかわらず、それ自体が真なるものとしてとどまるという、理性から独立した、可知的な存在者として理性にあらわれる。これらの可知的な存在者の在り方を特徴づけるのは、不可変性という在り方である。これらの不可変的な可知的存在者によって構成される世界を、可知的世界と呼ぶなら、理性を越えた或るものとは、この可知的世界全体を指すことになるのではないか。しかし、アウグスティヌスは、これらの不可変的に真なるものとしての可知的存在者の認識から、これらの不可変的に真なるものすべてを含むところの真理が存在することを、一挙に

結論している。この飛躍はいかにして理解されるのであろうか。

三

さて、これらの可知的存在者の相互の関係については、アウグスティヌスは比喩を用いた説明を試みているが、明瞭な回答を与えてはいない。むしろ、アウグスティヌスの関心は、これらの数や知恵の認識の拠ってきたところ (unde, ubi) を問うことによって、可知的世界の根拠を探ることに向けられていると思われる¹²⁾。この根拠は、理性が個々の可知的存在者を認識する際の、可知的世界の認識の根拠への問いであると考えられる。と同時に、可知的世界の存在者が個々別々に存在するのではなく、それらの可知的存在者のすべての存在を根拠付けるところの、可知的世界の實在の根拠への問いであるとも考えられる。すなわち、知恵や数などの可知的存在者が不可変的に真なるものであると理性が認識する際に、これらの不可変的に真なるものを、不可変的に真なるものとして存在せしめているところのものが、可知的世界の實在の根拠として問われているのである。

さて、アウグスティヌスは、これらの真なるものと真理との関係を、真理がすべてのこれらの真なるものを「包含する (continere)」という言葉で言い表わしている¹³⁾。理性を越えた或るものが、個々別々の複数の可知的存在者ではなく、可知的世界の認識と實在の根拠であるところのただ一つのものであるとされるのは、真理と、真なるものとをめぐる、この包含の関係なのである。しかし、理性が、判断の場において認識するのは個々の可知的存在者であり、時間の中においてある理性は、可知的存在者すべてを一挙に同時的に認識することはできない。では、真理が真なるものを包含するというこの包含関係を、理性はいかにして認識するのであろうか。

四

アウグスティヌスは可知的世界における真なるものの認識と、可知的世界の根拠としての真理の認識との間に、何らかの区別をしているのであろうか。さきに、可知的世界の存在者の在り方が不可変性という特徴を持つことがあげられたが、可知的世界の根拠としての真理も、不可変性という在り方をしている。それゆえ、両者はともに可変的理性を越えて不可変的に存在するという点で、可変的理性による認識によって段階的に区別される必要がないのではないとも考えられる。しかし、真理と真な

るものとの関係が、前者が後者を包含するという関係であることが、何らかの仕方では理性に認識されるのであるなら、その際、区別の原理は、もはや、可変性と不可変性ではありえないだろう。『自由意志論』第二巻において、可知的存在者としての知恵と数との関係は、比喩による説明にとどめられており、断定的な結論は出されていない。だが、次のことは主張されている。「両者とも真であり、しかも不可変的な仕方では真であるということは少なくとも明らかである」¹⁴⁾。今、この問題の手がかりをこの明らかである (*manifestum est*) ということに求めてみよう。

アウグスティヌスは『自由意志論』の第二巻において、明らかであるという語を頻繁に用いているが、この語が重要な意味を持たされている箇所が幾つかある。まず、神が存在することがいかなる仕方では明らかであるかと問われる箇所である¹⁵⁾。次に、自己の存在、生、知解の三つのものが明らかであるとされている箇所である¹⁶⁾。さらに、可知的存在者が不可変的に真なるものであることが、明らかであるとされる箇所である¹⁷⁾。ここでは、可知的存在者について用いられているところの明らかであるということについて考察する。

理性が個々の可知的存在者を認識するとき、その認識は、理性にとって一種の明るみの中で行なわれるのであるが、この明るみのよってきたるところはどこであるのか。それは、理性が可知的存在者を認識するときに伴うところの明らかであるとの明証性の源泉の問題である。時間のなかにおいてある理性は、可変的なものとして可謬性を含んでいるので、可知的存在者の認識に伴うところの明証性の源泉を、理性に内在的なものに求めることはできない。むしろ、この明らかであるとの明証性は、個々の可知的存在者がそこにおいて理性に開かれてくるところの、根源的な開示性として考えられる。そして、この根源的な開示の働きをするものが、あらゆる可知的存在者をそのうちに包含するところの真理であると考えられる。したがって、理性が、真理と真なるものとの包含関係を認識するのは、個々の可知的存在者の認識に伴うところの明証性が、個々の可知的存在者を開示するところの真理の側からの超越的な働きかけによって、与えられるということを経験するからである。では、このような開示の働きをなす真理の存在は、理性によって、可知的存在者の認識を介して、間接的に認識されるのであるのか。

アウグスティヌスが、真理は「自らを呈示する (*se praebere*)」「現存する (*praesto est*)」¹⁸⁾とか、「みよ。君にとって真理そのものが存在する (*ecce tibi est ipsa*

veritas)』¹⁹⁾ と対話者に呼びかけているとき、これらの箇所では、真理の存在の現前性が語られていると考えられる。この場合、理性は可知的世界の存在を媒介にして、可知的世界の存在の根拠としての真理の存在を間接的に知解しようとしているのではない。むしろ、可知的世界の存在者が理性の判断における判断の規範として、明証性をもってあらわれるとき、可知的世界の存在者を明証性をもって理性に開示するところの真理の存在が、個々の可知的存在者の存在に即して、現前するものとして、理性にあらわれるのである。

アウグスティヌスは、また、神の存在の証明における自らの思索の道行きを回顧して、次のように語っている。「実に、神は存在し、しかも真にかつ最高に存在する。私が思うには、私たちは今や、このことを疑いなきものとして、信仰によって保持するのみならず、いまなお、きわめてかすかではあるが、確実な認識の形式によってもまた、触れているのだ(adtingimus)』²⁰⁾。この adtingere という語は、到達するという意味とともに接触するという意味も持つ。神が存在することが明らかである(manifestum est) と知解するとは、可知的存在者の存在を明証性をもって開示するところの、理性に現存する真理の存在に、接触するということなのである

五

最後に、この神の存在の証明が信仰から知解へという探求の過程に置かれていたことを念頭において、この証明における人間の探求と発見の全過程に、どのような仕方
で神の働きが関わっているのかについて、考察してみる。アウグスティヌスにとり、このような探求を引き起こし、また、発見を可能にするのは、「主御自身が促すこと
によってわたしたちが求めるものを、同じ主御自身が示すことによってわたしたちは
見出すでしょう』²¹⁾ とあるように、人間に対する神の働きの先行性である。アウグ
スティヌスは、理性を越えた或るものが存在することを証明するという際にも、demon
strare という語を用いるが、主御自身が示すことによってというこの箇所において
も、また、同じ demonstrare という語を用いている。しかし、この際、神の働きに関
して言われるところの demonstrare とは、人間が知解の遂行としてなすところの、
証明するという意味とは別の意味を持つものであると考えられる。では、それはどの
ような意味か。

まず、人間が知解の遂行としてなすところの demonstrare とは、アウグスティヌ

スにおいて、人間のこの世における探求と発見との有限性の自覚のうちに捉えられていることに注意したい。アウグスティヌスによれば、神的事柄を人間が発見することについて、「これらの事柄が、この世の生において、また、かくのごとき我々によって見出され得るかぎりであるが」という限定が加えられねばならないのである²²⁾。神的事柄が人間にとって完全に十全なあらゆる仕方で見出されるのは、顔と顔とを合わせて神を見るところの来世的な神認識においてでしかありえないであろう。しかし、この世に生きる人間も神の促しにより、求めるならば、神が示すことにより限定的な仕方で見出すことができるのである。そして、人間にこのような発見を可能にする、神の側に用いられている *demonstrare* とは、人間が神の存在を証明するという際の証明するという意味とは異り、神が、人間の知解の探求に応答して、人間にその知解の探求の対象とするところのものを示すこと、証示することという意味として捉えられる。人間にとり神の存在を証明するという意味での人間の側の *demonstrare* の営みについては、或るものが理性を越えて存在するということを証明することによって、証明の営みとしては十分である²³⁾。しかし、神の側の *demonstrare* の働きは、神が絶えず人間に知解の探求を促し、人間が求めることを示し続けるという仕方働き続けるという点で、この世においては人間にとって、終結することなく、来世的な神認識にいたるまで続くものであると考えられる²⁴⁾。

それゆえ、アウグスティヌスがこの神の存在の証明の最後の部分において、一種の真理への賛歌ともいうべき、修辭的な美文を残しているのは、単なる付加ではないのである。そこでは、真理を「抱擁する (*amplectere*)」、あるいは、真理を「享受する (*frui*)」といった表現が出てくる²⁵⁾。さらに、アウグスティヌスは、真理を人格化しており、この真理を人となった真理すなわちイエス・キリストと同定する。そして、ヨハネ 8:31~32 の聖句を引用し、「もし、あなた方がわたしの言葉の中にとどまるなら、あなた方はまことにわたしの弟子なのです。そして、あなた方は真理を知り、真理はあなた方を解放するでしょう²⁶⁾」との聖句を引用している。ここでは、「真理を知る (*cognoscere veritatem*)」との表現が用いられている。この *cognoscere* は、神の存在の証明の遂行に先立って、信仰の賜物としての知解が与えられることの根拠として引用された、ヨハネ福音書 17:3 において、用いられた語でもある。このような、*cognoscere* は人間が神との親密な関係において、賜物として受けとる知解のことを指すのである。

以上のように、アウグスティヌスの神の存在証明において、真理の存在が人間の理性に現前してくるとき、この証明は、来世的な神認識の前味わいとしての、この世におけるかぎりでの信仰の知解としての性格を持つ。そして、この真理の現前に触れるとき、理性には、来世的な神認識の前味わいとしての喜びが伴うのである。

注

- 1) *De libero arbitrio* II, 3, 7. テキストは、Bibliothèque augustinienne, vol. 6, 3^e édition, Desclée de Brouwer, 1976 を使用した。なお、『自由意志論』全体の中での神証明の位置付けについては Cf. Waltraud Maria Neumann, *Die Stellung des Gottesbeweises in Augustins De libero arbitrio*, Hildesheim, 1986.
- 2) *De libero arbitrio* I, 2, 4.
- 3,4) *ibid.*, II, 2, 6.
- 5,6) *ibid.*, 3, 7.
- 7) *ibid.*, 5, 12.
- 8) *ibid.*, 6, 14.
- 9) *ibid.*, 8, 20; 9, 25.
- 10) *ibid.*, 10, 29.
- 11) *ibid.*, 12, 34.
- 12) *ibid.*, 8, 23; 10, 28.
- 13) *ibid.*, 12, 33.
- 14) *ibid.*, 11, 32.
- 15,16) *ibid.*, 3, 7.
- 17) *ibid.*, 11, 32.
- 18) *ibid.*, 12, 33.
- 19) *ibid.*, 13, 35.
- 20) *ibid.*, 15, 39.
- 21,22) *ibid.*, 2, 6.
- 23) *ibid.*, 15, 39.
- 24) 神の存在証明の議論の後、何であれ善いものはすべて神によって存在するのかどうかという第二の問いに探求が進められていく。そこでは、可感的世界の被造物の美はあくまでも「痕跡 (vestigium)」であることと、被造物の美を通して神が「合図 (nutus)」を送っているという思想が展開されている。Cf. *ibid.*, 16, 43. このように、被造世界の可感的事物を通して、神は人間にたえず探求を促しているのである。Olivier Du Roy は、アウグスティヌスの思想の発展を上昇から、創造論的形而上学へという道行きとして捉え、『自由意志論』をその過渡期における著

作とみなしている。Cf. Olivier Du Roy, *L'intelligence de la foi en la Trinité selon saint Augustin*. Paris, 1966. ただし、Du Roy の『自由意志論』の年代をめぐる仮説によると、第一巻の終結部にあたる I, 16, 35と、第二巻の導入部にあたる II, 3, 7 における三つの問題の設定とは、第二巻の II, 16, 44 以下の部分と第三巻全体と同時期に書かれ、それ以前に書かれた第一巻と第二巻の他の部分に、編集上の意図から後で挿入されたことになっている。この仮説については、G. Madec による批判がなされている。Cf. G. Madec, *Bibliothèque augustinienne*, vol. 6, 3^e édition, Desclée de Brouwer, 1976, introduction pp. 159-162.

25) *De libero arbitrio* II, 13, 35.

26) *ibid.*, 13, 37.